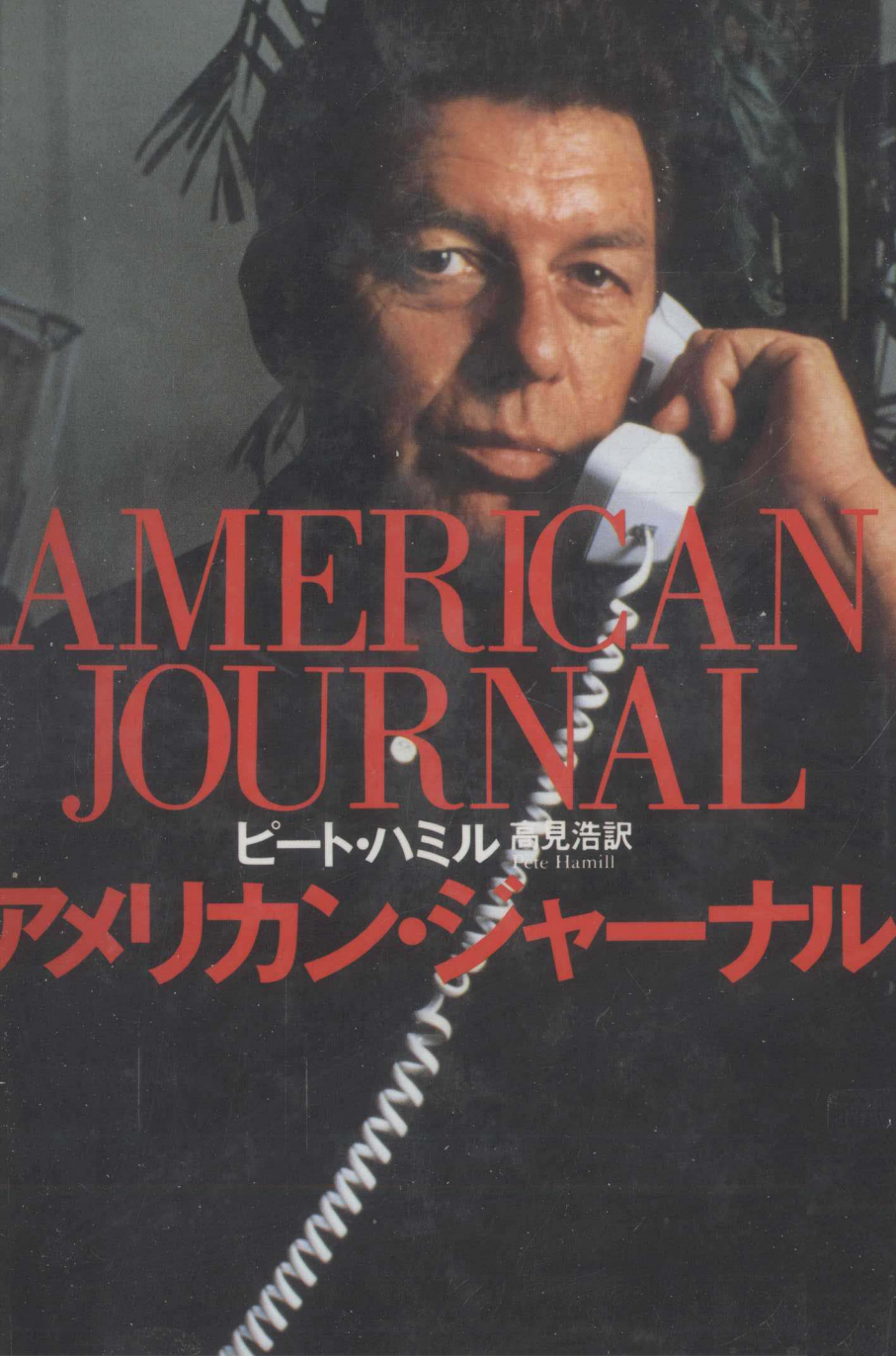

AMERICAN JOURNAL

ピート・ハミル 高見浩訳

Pete Hamill

アメリカン・ジャーナル

AMERICAN JOURNAL

ピート・ハミル 高見浩訳
Pete Hamill

アメリカン・ジャーナル

青木書店

アメリカン・ジャーナル

1991年6月15日　第1版第1刷印刷
1991年6月20日　第1版第1刷発行

定価はカバー・帯に
表示してあります。

著　者／ピート・ハミル
訳　者／高見　浩
発行者／青木理人
発行所／株式会社 青木書店
東京都新宿区早稲田鶴巻町538
Tel：03-3202-3999　Fax：03-3204-1187
印　刷／協和印刷所
製　本／黒岩大光堂

©1991 *Printed in Japan*
ISBN 4-250-91021-0

日本語版へのまえがき

1

ジャーナリストの仕事は、常に不完全さを免れ得ない。たとえ全力を振り絞って記事を書きあげても、これで終わったという実感はなかなか持てないものだ。精魂込めて書きあげた記事は、依然として穴だらけであり、苦労して探りだした真実も全体の一部でしかない。この挫折感にいやおうなく襲いかかられるのは、たいてい深夜すぎ、すでに締切り時間がすぎて、もはや旺盛なアドレナリンの働きが何の慰めも与えてくれなくなったときである。記事はすでに書きあげられて、手元から離れている。もう活字になっている頃合いだろう。いまからとりもどして書き直そ

うにも、もはや手遅れだ。その瞬間、まともなジャーナリストならだれしも、ああもうすこし時間があれば、もう少し枚数にゆとりがあれば、と慨嘆するにちがいない。そう、あと一日あれば。一週間あれば。いや、これは信じがたいほどの贅沢だが、あと一か月あれば。そうすれば決定的な事実を掘り起こし、燦然たる光ですべての事実を照射できるのだが。主題がなんであろうと、もう三千語、五千語、いや一万語書き添えるスペースがもらえれば、それこそジャーナリストの理想境に入ることができたのだが。そうすれば、それ以上ただの一語も書き添える必要のない、事実と洞察力と文学的スタイルが完璧に融合した一文をものすることができただろうに……。

だが、生身のジャーナリストが働く現実の世界では、十分な時間と枚数が与えられることなど決してない。しかも、ジャーナリズムの諸々の要素中もっともとらえがたいもの、すなわち、あの〝幸運〟は、常に払底しているのである。ある意味で、〝幸運〟は――あまりにも気まぐれであるが故に――もっとも重要な要素といってよかろう。たとえば、戦争報道を考えてみるがいい。どんなに辣腕の記者だろうと、悪運にとりつかれれば、激しい戦闘の最初の日に戦死してしまうかもしれない。一方、運良く猛爆撃にさらされて生きのびた新米記者は、翌日の明け方までには一躍有名になっているだろう。もちろん、戦争でなくともいい。ニューヨークの二人の新聞記者がブロードウェイに向かって歩いていたとする。ある街角で一人は左折する。そこでは万事平穏無事で、彼にとってはなんの役にも立たない。ところが反対側に右折した記者は、そこで偶然ギ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ャング同士の銃撃戦に巻き込まれ、ピューリッツァー賞をものしてしまう。これも、〝運〟のしからしむるところと言っていい。

すべてのジャーナリストは――ジャーナリズムの紅燈地帯とも言うべきあのゴシップ物のジャンルで働いている物書きといえども――ジャーナリズムという様式に特有の欠点は克服できると信じている。だが、ジャーナリストならだれしも自覚しているはずである、この様式に課されたもっとも深刻な制約は人間心理の驚くべき神秘の数々に深く分け入ることができない点にあるということを。黒白のはっきりした事実なら、どんなジャーナリストも明瞭に伝えることができよう。たとえば、野球の試合の結果、バングラデシュの洪水の犠牲者数、はたまた国政選挙の結果とその意味。

だが、それだけなら、優秀な事務員にだってやってのけられるはずだ。事実や数字にもっと真実味を与えることができるのは、書き手の描写力であり、細部を見逃さない眼力であり、どんな陳腐な光景だろうと細部の肉づけによって精彩を帯びさせてしまう能力だ。しかし、それだけの腕のあるジャーナリストにも、そういう行為をしてしまう人間心理の深淵までは読みとれない。だから彼には、ある結婚が終焉に至る過程までは書けないのである。一人の子どもの死の背景や、失業した人間の哀しみまでは書けないのである。そう、個々の事件に伴う悲哀、苦痛、安堵、激怒、嫉妬、幻滅、狂喜までは書けないのだ。

かくして、その種の、人生のより深い真実を探究しようと願う書き手は、フィクションに転向することになる。アーネスト・ヘミングウェイ、グレアム・グリーン、アルベール・カミュ、レイモンド・チャンドラー、ガブリエル・ガルシア・マルケスといった、多彩な作家たちがすべて新聞記者出身であるのは、偶然ではない。彼らはすべて、ジャーナリズムに対する欲求不満から小説を書きはじめたのに相違ないと私は信じている。

2

それでも、ジャーナリズムというこの不完全な様式にこだわりつづける書き手たちは存在する。私も、その一人だ。

私はこれまで何冊もの長編小説や映画の脚本を書いてきた。短編小説になると、百編を越えているだろう。小説はいまなお私に最大の挑戦の機会を与えてくれるし、物書きとして最高の喜びを与えてくれる。だが、一方で、私は依然、新聞や雑誌の騒然たる世界に惹かれつづけているのだ。それでいまも新聞のコラムを書いている。新聞だけではない。『エスクァイア』にも連載コ

ラムを毎月書いているし、ほかの雑誌にも紀行文やエッセイを書いている。友人たちの目に、これはある種の病気のように映るらしい。もうこれ以上稼ぐこともないじゃないか、と連中は言う。その手のコラムを書かせたらアメリカ一の名手だということは、とっくの昔に証明してみせたじゃないか。もういい加減に小説に専念しろよ。それに――と、連中は一段声を落とし、憐憫の情をにじませながら言う――あんただってもう若くはないんだ。新事実を知りたいという好奇心と情熱に燃え、それこそガソリン満タンで潑剌と動きまわっていた若き日は、もう遠い彼方に過ぎ去ったんだぞ。

こういう声に対して、理路整然と反駁することは難しい。彼らの言うことにも一理あるからだ。けれども、もちろん、私にも、このジャーナリズムという様式にこだわる明確な理由がないわけではない。そう、通例一段高い芸術とされている小説や詩を書く動機に劣らず複雑で、主観的で、のっぴきならない理由が。

まず第一に、好奇心、というやつがある。私は往々にして、あるテーマに関して何も知らないからこそ、それに関する新聞や雑誌からの依頼を引き受ける場合が多い。当然のことながら、そのテーマに関して堂々と論陣を張るためには、関連資料をすべてあたらなければならない。古い新聞のスクラップをはじめ、伝記や歴史書の類を当たるのはもちろんのこと、関連する映画を見たり、音楽を聞いたりもしなければならない。それらすべてを吸収して初めて、取材にとりかか

るのが、私の流儀である。したがって、その記事を書きあげたときには、依頼を受けたときには知らなかったことに精通していることになる。ジャーナリズムとは、この世で最も偉大な教師なのだ。自分の出身大学はアメリカの新聞だと、私はかねがね思っている。

人物や場所のスケッチに加えて、私は、〝社会評論〟とでも形容するのがいちばん適切な文章をも書いている。過去数十年にわたって、私は自分の街や祖国の病弊や欠点や欠陥を攻撃しつづけてきた――いつの日かそれらが是正されればいいと、はかない望みを抱きながら。事実、その結果是正された欠陥もいくつかある。一服の清涼剤のようなジミー・カーターの短い治世をはさんで、前後二十年間にわたってつづいたニクソンとレーガンの統治時代にも、リベラル側の陣営に立つわれわれにとって、ささやかな勝利がなかったわけではない。報道とエッセイの奇妙な混淆とも言うべき自分のコラムの中で、私はそれらの勝利を祝い、敗北を悼んできた。が、それら一連の批判的コラムを書いているとき、私は罪悪感に駆られることはない。むしろ愛と感謝の思いにひたされながら、アメリカを批判する文章を書いている。私は、貧窮に打ちひしがれた地から逃れてきたアイリッシュ系移民の息子だが、その昔、父祖の地であるアイルランドでは、偏狭な信念が日々の暮らしを支配していた。それに比べれば、現在のアメリカは幾多の欠陥を抱えながらも、その子供たちに、人種や階級の強固な壁を乗り越えるチャンスをいまだに与えつづけていると言えよう。だから、民主主義を信奉する一人の自由な人間として文章を書きながら私は感

謝の念を表わしてもいるのだ。自由を尊ぶ最良の方法は、それを実践することなのである。

たしかに私は、ジョージ・ブッシュとその支持者が愛国心と呼ぶ好戦的な大言壮語には我慢がならない。彼らの愛国心とは、何も考えずにアメリカ国旗を振りまわすことなのだ。それは祖国愛の仮面をかぶった、粗放で旧弊な国粋主義にすぎない。私とてアメリカ合衆国を深く愛している。その理由は、民主主義や美しい国土といったごく自然のものを含めて何千とある。それに私は、フレッド・アステア、ウィリー・メイズ、ビリー・ホリデイ、ボブ・フォッシー、チャーリー・パーカー、ウィリアム・フォークナーといった人々を生み育ててくれたという一事だけをとっても、アメリカが好きなのだ。けれども、アメリカ空軍のジェット機が空を飛ぶのを見たり、どこか遠い国をアメリカ軍機が爆撃するのをテレビで見たりしても、感激で胸がつまったりはしない。愛国的な音楽を聞いたところで、目がうるんだりはしない。そんな楽団の指揮者がいなくても、私は祖国に対する愛情を育むことができたのだ。私には、ブルックリン・ドジャースがあったのだから。

それゆえに、本書におさめられた一連の文章は、現在のアメリカの支配的な論調に対する中和剤として読んでいただけるはずだ。と同時にそれは、いまもつづいている私の教育の一環、いずれは小説の形で開花させるべきテーマの粗型、あるいは見慣れた事柄に新たな照明を当てそこなった試み、そしてまた、ある不完全な国に寄せる一連のラヴ・レターとしてもお読みいただけるだ

ろう。たぶん本書は――必ずしも上記の順とは限らないが――そのすべてなのである。

一九九一年五月、ニューヨークにて

ピート・ハミル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

アメリカン・ジャーナル/*American Journal*　目次

日本語版へのまえがき　1
失われた町　14
ジョン・ガディ、ロック世代のマフィアのボス　26
アメリカの聖戦　40
黄金の塔を建てた男　54
南部への逆流　66
〝トルティリア・カーテン〟の裂け目　78
一九八九年冬、プラハにて　90
ブラウン大学を揺るがす人種問題　104
テレビとドラッグの危険な関係　116

ビバリーヒルズ殺人事件　128
祖国ニカラグアを棄てた人々　140
ある異性愛者の告白　152
沸騰するメルティング・ポット　164
エヴァグレーズが死んでゆく　178
ニューヨーク・20世紀のソドムの街　192
訳者あとがき　207

●
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製
・コピーすることは，法律で禁じられています。

カバーデザイン◉坂川栄治（坂川事務所）

アメリカン・ジャーナル | *American Journal*

失われた町

女は角をまわってランダー・ストリートに入ってきた。

トラブルに巻き込まれていることは、一目でわかった。大柄で褐色の肌、腰の張った頑丈そうな体をしていたが、しきりに背後を、ブロードウェイの方角を振り返っている。と、男が姿を現した。剃刀のような細身の男で、ウールワース・デパートの壁ぞいに足早にやってきた。午後三時を少しまわった頃合いだった。

「おい！」男は叫んだ。「おいったら、コリーマ、止まれよ、聞こえねえのか？」

コリーマは止まらなかった。道路の向かい側で傍観している女たちや、玄関口の木造の階段にすわっている子供たちをちらっと見てから、彼女は背後を振り返った。歩調がいちだんと早まった。男もそうだった。そして、彼女がとうとう駆けだしたとき、男が追いついた。力ずくで自分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.